

いるといえる。

氷川流域の立神峽、その支流の美生川の美生、小原の滝、釈迦院の心見の滝、笹越峠のせんだんとどろ、二本杉から椎原に通ずる西の岩、五木川に沿う溪谷の天狗岩や頭地の鐘乳洞群、また大通峠の白岩戸、白滝、葉木の溪谷など枚挙にいとまがない。

★貴重な動植物群

この地域は、また我が国では殆んどみられない大自然の動植物の宝庫といえることができる。学術的にも貴重な存在であるが、シヤクナゲ、ヤマユリ等、山あ



— 釈迦院から見た五木の連峯 —

の自生の花木が観光客の目を惹き寄せ、また、静寂な空気を破って聞える野鳥の声が、暫し我を忘れさせるだろう。附近にはカモシカが棲息し、いま保護地区指定の計画が進められている。

★民族の歴史を語る資源の数かず

この地域の特長として忘れてならないものに、いわゆる人文的資源がある。これもこの公園指定への一つの「鍵」となったものであり、郷土史研究のためにはもちろん、観光利用上も「歴史公園」的な性格づけの大きな要素となっている。

平家の歴史にまつわる五家荘の伝承と一帯の山村のたたずまい……子守唄が聞えて来そうな五木一帯の風趣と民情……天台宗比叡山の末寺として栄えた釈迦院の古刹と、一帯の幽玄な環境等がその代表的なものと言えるが、宮原一帯に広がる古墳群や、郷土色豊かな久連子の古代踊り、珍種「久連子おどり」（いずれも県指定の文化財、天然記念物）などが、美しくも静かな自然環境にとけ込んで、伝統豊かにうけつがれていることは、まことにすばらしいものがある。

★多彩な利用性

この一帯は地勢が一般に高峻で、気温も平地より五〜一〇度低く、更に都塵を遠く離れ清涼な環境で包まれているので、特に夏季の利用と、新緑、紅葉の頃の利用に適している。登山、ハイキングによる自然探勝をはじめ、キャンプ等の野外活動、名勝旧跡等の文化財探訪、植

— 平家落人のロマンを秘める五家荘 —



物研究旅行等、多彩な利用性を有する地域で、家族向けに絶好のリクレーションポイントが多く、あらゆる階層の人達に利用してもらえらという特徴を持っている。

今後の道路交通施設の開発によって、すぐれた自然休養地として発展する十分な素地を持っているといえよう。

そこで、利用計画としては熊木、天草、八代、水俣、人吉、市房県立公園、矢部周辺県立公園等の関連地域から、この地域に到達するためのルートの整備をはじめ、立神峽—大通峠—頭地—宮園—五家荘—二本杉—河合場—柿迫—立神峽の循環ルートや、五家荘原始林探訪ルート、河合場—椎原、板木—柿迫、下屋敷—二

本杉のルートを基幹ルートとして整備し、登山道路や、溪谷探勝のための自然探勝路、文化財資源の巡廻ルート、駐車場、食事休憩施設、国民宿舎、ユースホステル等の健全な宿泊施設、園地をはじめ、案内、説明のための施設、野営場施設等の利用施設を整備することが必要である。ともあれ、この地域がもつ自然景観と格調ある民族歴史にふさわしい特性を推し進め、新しい観光時代におけるある観光開発民レクレーションの場として、積極的な利用をはかることが最も大切なことといえよう。(観光課)

くまもとの明治百年

— その1 —

維新のバスに乗りおくれ

山口 白 陽

(呼ぶ) 主宰

比喩ははなはだ卑俗であるが、熊本には昔から「牛の擧丸」という俗語がある。牡牛の歩むのを見た人なら納得できると思うが、牛の擧丸は大きくぶら下がっているので、歩くたびに左右へ揺れる、一步は右に一步は左にといった工合に擧丸はその都度右股によるかと思えば左股にくつつく。というところから、この「牛の擧丸」という

のは、時に応じて右によったり左にしたりして、一定の方針がないこと、いわば日和見主義のイージョイゴイングを意味するのである。

明治百年の第一歩がふみ出される維新前後の本藩が正にこれであった。なぜか。

もともと肥後の藩主細川家は、徳川氏譜代の臣である。一六三二年細川忠

利の襲封以来二百余年の間、五十

四万石の大々名として安穩に暮らしてきたのも一に徳川

家の恩徳によるとの潜在意識が、藩

主をはじめ全藩士

百姓町人に至るまで牢として動か

ないのも無理はない。さればこそ明

治維新という歴史



— 横井小楠 —

余年の間、五十

の大革命に当っても、オイソレと勤皇

に味方して錦の御旗をふりかざすわけにはいかなかった。それにはまた、討

幕の主力たる薩長への反感も裏くって

いる。三百年來地盤を築いた幕府方が、

そう簡単に敗れるはずもないという自

惚れもあつたらう。これらの条件が複

合して藩政を司る学校党の大勢は大き

く佐幕の方へ傾斜していたのである。

ところが、現実には日を逐って勤皇方

へ有利に展開し、佐幕方の旗色は甚だ

振わない。

やっぱり先物を買うなら勤皇討幕に

味方した方が有利だわい、という功利

心が抬頭してきた。今度はそっちの方

へ走り出すのがある。

すなわち「牛の擧丸」の様相が歴然

としてきたのである。藩論は混乱し、

モッコス精神の持主としては、はなはだみつともない維新劇の道化役者ではあった。

こうした中であつて、肥後っ子のために気を吐くものは横井小楠と宮部鼎

蔵である。

小楠通称平四郎、藩学時習館の居寮

生という大秀才で、学問見識の卓抜な

ことは、かの吉田松蔭をして傾倒せしめた一事でも知られる。

小楠は時習館出身であるから当然学校党の一人たるべも経歴をもつが、彼は時習館の教育がいわゆる文字の末に走って、辞句の詮さくに目も足らず、空理空論を弄んで学問の実践化を忽せにするにあきたりなかつた。

その結果、独自の理論をうちたてたのを人は呼んで実学といひ、その門に集まるものを実学党となえた。

横井平四郎さんな実学なさる

学に虚学があるものか

という落首は、小楠を揶揄する肥後一流のワマカンであるが、

それはともかく、小楠の志は天下国家にあって一藩内の論争などはどうでもよかつた。

彼の主張が理解されなかつたことが結局彼を死に導く悲劇の素因となつたのは是非もないことである。

(次頁へつづく)